

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

芝の平地シーズンが終盤戦に突入しようとしているこの時季は、欧州の競馬メディアがじわじわと、話題の軸を障害戦線にシフトさせつつある季節もある。その動静が、来たるべき14／15年シーズンにおける大きな焦点の一つとなっているスプリンターサクレ（騙8、父ネットワーカー）が、今月のこのコラムの主役である。

父がドイツ産種牡馬ネットワーカー（その父モンズン）、母がフランス産牝馬ファティマという血統のスプリンターセクレは、2006年4月23日にフランスで生まれた。

平地の競走馬以上に、現役中のトレードや転厩が頻繁に行なわれるが欧州の障害馬だが、そんな中にあってスプリンターサクレは、デビューから今日まで終始一貫して、英国ランボーンに拠点を置くニッキー・ヘンダーソン調教師の管理下で、キヤロライ・ムールド女史の所有馬として現役生活を送っている。

デビューは4歳春で、まずはナショナルハンツフラット（障害馬用の平地戦）を2戦し連勝。同年10月のハードルデビューは2着に終わったが、その後ハードルで2連勝を飾った同馬は、シーズン末にチエルトナムのG1シジュプリームノーヴィスハードル（芝16F 110y）に出走して3着となつて、シーズンを締めくくつている。

スプリンターセクレの快進撃は、ステイブルチエイスに転向した11／12年シー

ズンに始まった。緒戦のノーヴィスチャイス（芝16F 110y）を24馬身差で制すと、続くG2ウエイワードラッド・ノーヴィスチャイス（芝16F）を16馬身差で制して重賞初制覇。次走G2ゲイムスピリットチャイス（芝17F）も白星で通過すると、チエルトナムフェスティヴァルのG1アーケルチャレンジトロフィー（芝16F）に駒を進め、ここでも7馬身差で制してG1初制覇を達成。続くエイントリーのG1マグハル・ノーヴィスチャイス（芝16F）も13馬身差で制して、5戦5勝でシーズンを終えている。

続く12／13年シーズンも、まずは成績から記せば5戦5勝。5戦はすべてG1で、ステイブルチャイス・2マイル戦線の最高峰と言われるチエルトナムフェスティバルのG1クワイーン・マザーチャンピオンチャイス（芝16F）を19馬身差で制したのを筆頭に、この路線の主要競走を軒並み持つていき、188という今世紀に入つて2番目という極めて高い公式レイティングを獲得することになった。

すなわち、ステイブルチャイスを走るようになって10戦10勝。2着馬に最も迫られた時でも4馬身半差という、圧倒的力量を誇るスーパースターがスプリンターサクレが不在だったクワイーン・マザー・キッズチャイス（芝16F）を制したサイアーリンターサクレが不在だったクワイーン・マザーチャンピオンチャイスを制したサイアーデゲルージー（騙8、父マイリスク）も目標にしている一戦だ。

いきなりの頂上決戦となるG1ティングルクリークチャイスで、「スーパースター」スプリンターサクレの完全復活が見られるかどうか。欧州の競馬ファンは今から、12月6日を心待ちにしている。

13／14年シーズン、緒戦となつた、13年12月27日のG2デザートオーキッドチャ